

アドバイザー派遣事業 実施レポート

西部学びの会
代表 狩野 実

1. 研修テーマ 学校全体で取り組む「学び合い」への授業改善
2. 研修日 第1回 平成29年 6月15日(木) 名和中学校会場
第2回 平成29年 6月23日(金) 南部中学校会場
第3回 平成29年10月19日(木) 名和中学校会場
第4回 平成30年 1月25日(木) 南部中学校会場
3. アドバイザー 杉江修治 教授 (中京大学)

4. 研修のまとめ

県西部のいくつかの学校と共に協同学習に取り組み、「西部学びの会」を立ち上げてから8年目を迎えた。生徒がお互いに学び合う中で、より良い人間関係を育み、生徒の主体性、やる気、学力を伸ばしていくことをねらいとしている。授業研究の際には、学校間でお互いに声を掛け合い、授業を見合いながら、研修を深め合っている。本年も、そういった学校が集まり、教育センターの支援を受けながら研修を計画・実施することができた。

事後研究会では、毎回様々な学校の先生とマトリクス法によるグループ討議を行い、①工夫・良かった点、②手立て・改善が必要なことについて、いくつかのグループで話し合いを行った。その後、グループ討論の発表をし、全体で共有した。今年度の各グループの討論内容をまとめると以下のようである。

①工夫・良かった点、さらに伸ばしたいこと	②手立て・改善が必要なこと
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の流れが黒板に書いてあるので、今やっていること、次にやるのが分かりやすく生徒が安心して授業に臨んでいた。 ・課題に向かって関わり合いながら学習する姿が見られた。 ・学級の雰囲気がよく、楽しくペアやグループで学習が進められていてよかった。共感的に相手を受け止める態度がどの生徒にもあり、だれもが間違いを恐れずアウトプットしていた。 ・通訳読みや Read&Look up など多様な音読暗誦練習がよかった。 ・暗誦シートが3段階に分かれており、自分のレベルによって暗誦できるのがよかった。 ・教師の評価言が多く、よかった。 ・英語が苦手な生徒も一生懸命取り組んでいて参加度が高かった。 ・資料の提示の仕方がよかった。前後半に分けることにより、生徒の予想を裏切り、深く考えることができていた。 ・主発問に時間をかけるために前半の資料の読み取りはテンポがよかった。 ・個でじっくり考えていたので、グループになったときに意見が活発に出せていた。 ・学級の雰囲気がよく、意見が言いやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つけさせたい力を明確にする。 ・めあてと振り返りが一致していない。 ・内容を思い浮かべながら暗誦ができていたのか。そこを意識させる声かけが必要。 ・めあてが「本文の内容をペアで工夫して表現することができる。」ならば、抑揚や強弱をどうつけるかなど学び合いの場が持てる。 ・紙芝居の絵を見ながらセンテンスごとに暗唱してみてもどうか。(生徒がやりたい、覚えたい、と思える仕掛け) ・生徒の学力に応じた個々の課題を設定してはどうか。 ・振り返りを数値化してはどうか。 ・上位の生徒が伸びる課題を加える。 ・ALTや教師の発音を聞く機会を増やす。モデルを生徒に見てもらい、発音や抑揚を考えさせる。 ・最後に発表させるなど、個人の伸びを見取る機会を作る。 ・導入は必要だった。なぜこの内容をするのか捉えさせ、学びの価値を伝えたい。 ・板書の工夫がほしい。 ・班活動での意見交換で学び合いの姿はあつが、高め合うまでには至っていない。 ・主発問が「声をかけなかったのはなぜか」と

<ul style="list-style-type: none"> ・班の中で司会者がうまく進行していた。 ・最後の CM 映像の動画が生徒たちの心情に効果的に働いていた。 ・生徒から生徒へのリレー指名がよかった。 ・コの字の隊形は一人ひとりの意見が聞きやすくよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・消極的な部分を押しやるものではめあてが達成しにくい。 ・中学生の視点から主発問で筆者の視点に変わってしまった。 ・「自分ならどうするか。自分自身には何ができるか」を学び合いで話し合わせたい。色々な関わり方がある。他にはやり方がないかなど、多様な考えを出させたい。
--	--

アドバイザーの杉江先生からは、会場や実施回によって多少のばらつきはあるが、概ね次のような指導講評をいただいた。

- ・学級の雰囲気がよく、生徒たちがよく声を出し、前向きに取り組んでいた。
- ・生徒全員がコンパクトに集まって座っていて、「みんなで一緒に学んだ。」という気持ちが伝わってきた。
- ・マンネリ化しがちな Reading 活動を工夫して取り組ませてよかった。
- ・途中で、自己評価や相互評価を入れて、振り返りをさせると課題意識をさらに持たせられる。
- ・めあてと振り返りの不一致が見られた。
- ・3段階のレベルに分けた暗誦シートがよかった。
- ・はっきりとやるのがわかる、その暗誦シートを使い、「レベル1は全員が合格しよう。」「レベル2・3は、どんどんチャンレンジしてみよう。」など指示が具体的に出せるとよかった。
- ・挑戦的な課題をさせたい。生徒の力に高い期待を持って、難しい問題に挑戦させ、頑張ったという経験をさせることが大切。それが自信につながる。
- ・生徒たちが意見をよく話していた。
- ・資料の難易度が高くなかったため、ワンランク上の教材の準備を求めたい。
- ・学びのマップを与えるステップが必要だった。最後に「自分はどうか？自分には何ができるか？」を考える、と予告しておくとうよかった。
- ・道徳は協同学習でないといけない。学級全体での協同学習である。仲間からの意見を取り入れ、自分の意見を伝えることでクラスに貢献しともに高め合うことを実感させたい。
- ・何のために話すのか、自分の頑張りがどこにつながっているのかを理解させたい。
- ・しっかり話すこと、聞くことが大切。きちんと意見を伝え自分を高める、意見をしっかりと聞いて自分も高めると意識を持たせたい。
- ・授業内で学び切ることのできない生徒がいるのは仕方がない。
- ・全員がばらつきなく、よしやるぞ。やる値打ちがあるぞ。そう思える課題づくりが必要。
- ・指導すべきところは指導しなければならないが、関わりすぎると受け身の学びになる。
- ・わかりきっていることは時間をかけない。
- ・ペアやグループの課題や指示を明確にする。
- ・理科は、科学的に調べ、科学的にまとめるという視点が必要ではないか。
- ・指示がいい。導入から全員が参加している。
- ・わからない人から説明させる指導はよい。
- ・できたグループに役割をつくったのもよい。

さらに指導講評をふまえて、『協同学習の基本の確認』というテーマのもと、次のような話をしていた。

○授業づくりの基本的な観点—生徒主体の授業づくり
—めざす学力の捉え返し

○協同学習がめざす生徒の姿

- ・自主・自律の力
- ・強制社会をつくる民主的態度
- ・確かで幅広い知的習得

○教育を進める上での大切な2つの基本的な生徒理解

- ・生徒はだれもが成長したがつている。
- ・生徒はだれもが仲間とのより良い関係を求めている。

*教える教育⇒学びを支援する教育

*ひとりで学ぶ(個にとどまる学力)⇒共に学ぶ(社会で生きる学力)

○協同学習の考え方—グループ学習が協同学習ではない。

- ・生徒の認知過程を考えようえでの授業づくり。
- ・一人ひとりの学びを支える協同的・「課題解決志向的」な学級集団づくり。

*協同的な学級は「仲よし集団」ではなく「共に課題追求のできる集団」

○授業の一般的な流れ(モデルではない:協同学習に決まったパターンはない)

- ・明確な課題提示(まず見通し・MAPをもたせる、学びへの前向きな構えをもたせる。)
 - ・本時の課題の明示
 - ・授業の流れを知らせる(学び時計)。
 - ・学習内容の値打ちを理解させる。
- ・参加型の授業課程
 - ・しっかりとした個人思考
 - ・グループ、一斉での学び合い(課題に応じた進め方の技法の選択)
- ・学びの振り返り(成長の手応えを知る・学びの値打ちを確認する。)
 - ・漠然とした表現である「感想」で終わらせない。

○さまざまな学び合い

- ・個別学習でも仲間が学習促進効果をもたらす集団づくり
- ・グループ活動での学び合い
- ・学級全体の学び合い

○生徒のコミュニケーション能力

- ・生徒のコミュニケーション能力不足を学び合いがうまく進まない理由にしないこと。話し合いの成立は教師の仕掛け次第である。

○めざす学び合いの質

- ・個人の差を認め合った活動を基盤にしている。
- ・たがいの成長意欲を信頼し合う態度が基盤となっている。
- ・全員参加。
- ・意見を出し合い個人の理解を深め、広げる。
- ・意見を練り上げ、より質の高い解をグループ・学級で作り出す。

○学び合いの質を高める仕掛けづくり

- ・明確な集団課題を示す。
- ・学び合いをより成功できる手順の指示をする。
- ・練り上げる議論のできる仕掛けをする。
- ・学級の目標を工夫する。
- ・異質なメンバーで集団編成をする。
- ・適切な座席配置をする。(生徒間の距離への配慮)
- ・役割の指定をする。
- ・グループ間交流を採用する。

○生徒が動く時間をしっかり確保する。

- ・教師の話す時間をいかに減らすか。
- ・学び合い・個人思考への介入をいかに最小限にするか。
- ・無用な声かけをしていないか、意味のない活動をさせていないか。
- ・教師がかかわるべきタイミングもあるが、それはどんな時か。
- ・まとめ、振り返りこそ、学びの意味を知らせるとき。

- ・テキスト、資料の読解の時間をベースに置いているか。

各会場、校区の小学校の先生の参加も多かったので、協同学習について改めて共通理解できた。校区で授業のスタイルを同じくすることは、生徒の安心感につながるため、今後の小中連携にとって有益なものだった。また、転入された職員の研修や協同学習の基本を再確認したりするために、杉江先生による講習会も来年度に向けて有効だと考えている。

生徒同士の「学び合い」は、仲間づくりはもちろん、学力向上にも不可欠なものであるため、今後もそれぞれの学校で「学び合い」の実践がさらに深まっていくように声を掛け合い、研修を深めていきたい。

5. 添付資料

- ・指導案